



炎

HONOO

加藤 委 KATO Tsubusa

新里 明士 NIISATO Akio

伊勢崎 晃一郎 ISEZAKI Koichiro

加藤 亮太郎 KATO Ryotaro

金 理有 KIM Riyoo

谷 穹 TANI Q

田淵 太郎 TABUCHI Taro

松永 圭太 MATSUNAGA Keita

東京展

高島屋日本橋店 本館 6階 美術画廊

2022年11月23日(水・祝) → 28日(月)

大阪展

高島屋大阪店 6階 美術画廊

2022年12月14日(水) → 26日(月)

太古の昔、炎を操る術^{すべ}を手に入れた私たちの祖先は、暖を取り煮炊きをするようになったばかりか、うつわを焼きはじめました。土をこね、形をととのえ、火で焼き固める。数千年にわたる繰り返しのなかで重ねられてきた工夫や知恵。その蓄積が、青や緑の釉が被った鉢、絵や文様に彩られた皿を生み出しました。

縄文土器はもちろん、桃山時代の織部も、江戸時代の柿右衛門もすべて、電気やガスのない時代に薪^{まき}や炭で焼いたものです。薪の状態、気温・湿度、風向き、器種の違いが窯の中の炎の流れに刻々と影響し、1000度を超す高温を保ち操るのは容易ではありません。その専門の職人「窯焚き師^{かまた}」は、昭和の末頃までやきものの産地で活躍していました。

しかし現代では、災害で電気やガスが数時間止まっただけで、やきもの焼成どころか湯を沸かすことすらまなまりません。人類が数千年にわたり連綿と伝えてきた炎の扱い方を、私たちはすっかり忘れてしまったかのようです。その意味で、便利で簡単な装置がいくらでもある時代に、あえて薪の窯で焚く人たちに私は畏敬の念を抱きます。

*

鰻^{うなぎ}や秋刀魚^{きんま}を炙^{あぶ}る様子を見るとき、炭の音、香り、熱気によって五感が開放されていくような感覚を覚えます。ガスや電気を使おうが美味しければよしとする合理的思考と、炭で焼く時の格別な情趣の差はどこにあるのでしょうか。

やきものもどこか似ています。時間をかけて1本1本薪を投じる作業は、窯の温度を上げるだけでなく、うつわにながしかの表情を加えていきます。それらはロジックでは説明し切れませんが、その時々^{時々}の炎のゆらぎを写す「加飾」であり克明な「記録」です。

つくり手の五感を開放する炎は、消えてなおうつわに宿り、それは私たちに伝わりまします。今回集った8人の作家たちは、本展のためにこの作業を行ってきました。プロジェクトの後に再び近代的な焼成方法に戻ったとしても、薪窯で得た知見は今後の作品づくりに何らかの影響をもたらすでしょう。土と木と風を駆使する彼らに見ることができるのは、古来からの「炎を操る」師の継承者の姿であり、それは五感を全開にして旨みを引き出す料理人の姿に重なります。

坂井 基樹

[公益社団法人日本陶磁協会事務局長]

今その時の
「炎」がつくる



杜松ノ木窯磁器 D15×W15×H85cm

薪による焼成は
普段から行っている仕事ではないのですが、
やきものの根源でもあるので、
とても興味があり機会を作っては焼いています。
今後の制作の中でもいろいろな窯に
挑戦していけるようにしていきます。



引出黒碗 D12×W12×H10cm

動き流れている“状態”と関わる
その連続によって醸されるヤキモノ感
人の想いの尺度を超え
時間をも背負いつつ
土や炎の定めを捕まえ
心が動く理由を見つける



孕 D33×W33×H43cm

自分の仕事は半分。
残り半分は、炎の仕事。
時空を超える美を探す。
遥かな旅路だ。



GLOBE D30×W30×H28cm

激しく、時にはゆったりと
揺らめく炎を見つめていると、
焼き物の成り立ちの根源的な姿を
感じる事ができます。
普段電気の窯で
精密な温度管理をしながら
作品を焼き上げる私に、
薪窯は新たな風景を
垣間見させてくれました。



天兒姫 D13×W13×H35cm

霞の向こうに「信楽」がある
時間をもたずに在る内側
そこは音のない音楽のようであればいい



信楽壺 D40×W40×H40cm

小麦粉と水と塩をこねればうどんができる
白い粘土をこねれば何ができるか
見たいから今日もつくる
そしてうどんを食べる



窯変白磁面取花入 D13×W13×H32cm

窯の前に座り、木端でおこした火が
徐々に大きな炎になる様を観察する。
その間にもお腹は減り、窯の火を使ってご飯を食べる。

鍋で煮炊きする行為の同一線上に薪窯があり、
生きるために必要なことと、やきものを作ることは
繋がっていると実感した。



幹 D25×W24×H30cm

加藤 委

KATO Tsubusa



1962 岐阜県多治見市生まれ

1978 日本陶磁器コンペティション・タイル制作・タイトル『海』

1979 多治見市意匠研究所修了

小田井窯勤務

1986 尼ヶ根古窯発掘調査参加、同古窯保存運動展開

2013 日本陶磁協会賞受賞

第7回円空大賞受賞

多治見市小名田町に新窯築窯

2021 薪窯展(日本橋高島屋、大阪高島屋)

新里 明士

NIISATO Akio



1977 千葉県生まれ

2001 多治見市陶磁器意匠研究所修了

2011 文化庁新進芸術家海外研修制度研修員(ボストン・アメリカ)

2021 薪窯展(日本橋高島屋、大阪高島屋)

現在、岐阜県土岐市にて制作

金 理有

KIM Riyou



1980 大阪府生まれ

2005 国際陶磁器展美濃'05(セラミックパークMINO)

2006 大阪芸術大学大学院芸術制作研究科修士課程修了

同大学院芸術研究科研究員

2007 同大学院非常勤助手

とよた美術展'07(豊田市美術館)

2009 神戸ビエンナーレ2009・現代陶芸展準大賞受賞(神戸メリケンパ

ーク)

2010 BASARA(スパイラルホール・東京)

2011 ヨコハマトリエンナーレ2011(横浜美術館)

2013 パラミタ陶芸大賞展(パラミタミュージアム)

2014 個展「Hypotharamaniac」(日本橋高島屋)

2021 特別展「No Man's Land ―陶芸の未来、未だ見ぬ地平の先―」

(兵庫陶芸美術館)

谷 穹

TANI Q



1977 滋賀県生まれ

2000 成安造形大学立体造形クラス卒業

2007 双胴式穴窯築窯

2012 単室式穴窯築窯

2015 LAND e SCAPe／ギャラリーパルク(京都)

これからの、未来の途―美術・工芸・デザインの鋭11人展

／京都工芸繊維大学美術工芸資料館

ロローロロ／京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

2016 ロローロロ／ギャラリーあしやシュール(兵庫)

2017 泥仲間／中ハシクシゲ×谷穹／ギャラリーあしやシュール

信楽 風景／陶 翫粹(京都)

2018 守破離／堀尾貞治×越野潤×谷穹／ギャラリーあしやシュール

黒 盤／陶 翫粹

2019 火色／陶 翫粹

Air／NOTA_SHOP(滋賀)

2020 健在する日本の陶芸 ―不如意の先へ―／益子陶芸美術館

リエゾン／桑野聖子×谷穹／ギャラリーあしやシュール

2021 第15回パラミタ陶芸大賞展(パラミタミュージアム)

No Man's Land―陶芸の未来、未だ見ぬ地平の先―／兵庫陶芸美術館

【パブリックコレクション】

ポートランド美術館(U.S.A)／兵庫陶芸美術館

伊勢崎 晃一郎

ISEZAKI Koichiro



1974 岡山県備前市生まれ

1996 東京造形大学彫刻専攻卒業

1998 ジェフ・シャピロ(ニューヨーク)に師事

2010 「現代工芸への視点―茶事をめぐって」(東京国立近代美術館工芸

館)

2012 第5回岡山県新進美術家育成「I氏賞」奨励賞

2014 第15回福武文化奨励賞

2019 「The 備前―土と炎から生まれる造形美―」(東京国立近代美術館

工芸館、他)

2021 薪窯展(日本橋高島屋、大阪高島屋)

加藤 亮太郎

KATO Ryotaro



1974 岐阜県多治見市生まれ

2000 京都市立芸術大学大学院陶磁器専攻修了

2014 パラミタ陶芸大賞展(パラミタミュージアム)

2015 幸兵衛窯 八代目を継承

2016 幸兵衛窯歴代展(古川美術館)

PANK工芸(楽翠亭美術館、茨城県陶芸美術館)

2017 引出用穴窯を築く

2019 幸兵衛窯歴代展(とうしん美濃陶芸美術館)

2020 9の時空(日本橋高島屋、大阪高島屋)

2021 薪窯展(日本橋高島屋、大阪高島屋)

岐阜県芸術文化奨励受賞

田淵 太郎

TABUCHI Taro



1977 香川県生まれ

2000 大阪芸術大学工芸学科陶芸コース卒業

2003 第21回朝日現代クラフト展優秀賞

2007 高松市塩江町に穴窯築窯

2013 平成25年度香川県文化芸術新人賞

2019 令和元年度香川県文化芸術選奨

2021 薪窯展(日本橋高島屋、大阪高島屋)

松永 圭太

MATSUNAGA Keita



1986 岐阜県多治見市生まれ

2010 名城大学建築学科卒業

2013 多治見市陶磁器意匠研究所修了

工芸都市高岡クラフトコンペティション コンテンポラリークラ

フト グランプリ

2014 第22回テーブルウェア大賞唐澤昌宏審査員賞

第70回金沢市工芸展金沢市長奨励賞

伊丹国際クラフト展奨励賞(光陽社賞)

2016 第24回テーブルウェア大賞佳作

第72回金沢市工芸展金沢市工芸協会会長奨励賞

金沢卯辰山工芸工房修了

2019 滋賀県立陶芸の森にて滞在制作

カリフォルニア州立大学ロングビーチ大学にて滞在制作


現在、岐阜県土岐市にて制作



KATO Tsubusa



NIISATO Akio



ISEZAKI Koichiro



KATO Ryotaro



KIM Riyoo



TANI Q



TABUCHI Taro



MATSUNAGA Keita

発行日 2022年11月23日
発行 高島屋美術部 ©2022
撮影 photo works tanaka
制作 ニューカラー写真印刷株式会社
題字 田淵太郎

 Takashimaya